どを用いないで、単に水のみで水浴することをいう。夫が旅に出て不在中は、妻は単に水のみで水浴し、香油を用いない（*Meghadūta*, 88）。

(24) *DN.* vol. II, pp. 7 ; 52. Cf. *Buddhavaṃsa* XXVI, 13. rājan とは近代西洋の esquire というほどの呼称で、consul とか archon とかいうような名誉称号であったのだろう、とリス・デヴィッズは説明している（*Early Buddhism*, London, Constable & Co., 1910, p. 27）。オルデンベルクはスッドーダナは貴族としての大土地所有者にすぎなかったと考える（*Buddha, Sein Leben, Seine Lehre, Seine Gemeinde*, 13. Auflage, hrg. von Helmuth von Glasenapp, Stuttgart, Cotta Verlag, 1959, S. 118）。

(25) *Therag.* 534 ; *DN.* vol. II, p. 52. マーヤー夫人がゴータマを生んだともいう（*Therig.* 192）。マーヤー夫人は Gotami とよばれている（*Therag.* 535）。

(26) tidivasmi modati, *Therag.* 534.

(27) *DN.* vol. II, pp. 7 ; 52.

(28) 赤沼智善編『印度仏教固有名詞辞典』（法蔵館、一九六七年）六一三ページ以下によると、この原語は『ジャータカ』（とくに Nidānakathā）と *Dipavaṃsa* III, 47 ; XIX, 18 に出ているのみである。その名の解釈について、金倉円照『印度古代精神史』（岩波書店、一九三九年）二九一ページ参照。

(29) Khattiyo jātiyā khattiya-kule uppanno.

(30) 『大唐西域記』第六巻（大正蔵、五一巻、九〇〇ページ下）。

(31) 唐の一里には小程と大程とあるが、小程は日本の四町九間五尺、四五四・四メートルに相当する（足立喜六『法顕伝』法蔵館、一九四〇年、七―八ページ）。

(三) カピラ城

シャカ族の根拠地または首都はカピラヴァットゥ[1]（Kapilavatthu Skt. Kapilavastu,[2] カピラ城）という

町（pura）であったといわれている。『カピラヴァットゥなるものは、シャカ族の本拠である。』（DN. III, 1, 14. vol. I, p. 91）

この都の名はカピラという昔の仙人と結びつけて考えられていたようである。後代の伝えによると、カピラ仙は〈地の網〉（Bhummajāla）という名の特別の智慧で、この地を見て、豚や鹿が獅子や虎を逐い、鼠が蛇を逐うのを知って、この地こそ地上で第一の城市を作るべきところであると予言したということである。[3]「カピラ仙」とはサーンキヤ学派の開祖の名でもあるが、それと直接の関係はないであろう。「カピラ」は元来火の色の赤褐色に名づけたものであるといわれるが、それが聖者の名ともなったのである。

なおこの都は雪山の下、バーギーラティー（Bhāgirathī）河のほとりにあるという。[4] この河の名はバギーラタ（Bhagiratha）という仙人がシヴァ神の恵みによってこの地上にもたらした河という意味で、ガンジス河[5]のことをいうのであるが、ガンジス河の支流であるので、このように呼んだのであろうか。

当時はもう都市（nagara）も現われていたのに、[6] カピラ城のことを都市とはいわないのであるから、おそらく大きな町ではなかったのであろう。ただ仏教がさかんになるとともに、釈尊の故郷の町として、注意されるにいたったらしい。[7] そうして遅く成立した経典では「都市」（nagara）「首都」（rājadhānī）と呼ばれるようになった。[8]

かれらの首都カピラヴァストゥのあった位置は、まだその所在がつきとめられていない。従来は、現在ネパール領内のタラーイ（Tarāi）地方のティラウラコット（Tilaurā Kot）[9] に比定されていた。[10]［ネ

パールの諸学者は、現在でもそのように主張している（立正大学調査隊による発掘報告参照）。」それは、釈尊の誕生地（ルンビニー）から十五マイル離れたところにある。後世（七世紀）に玄奘三蔵がこの地を訪れたときには、その「王城」つまり都市はすっかり荒廃に帰していて、広さも識別し得ぬほどであったが、そのなかの「宮城」は周囲が十四、五里（日本の里程なら約一・四里）あり、煉瓦からつくられていたという。また、法顕はこの地を訪れて、『カピラヴァストゥ国は非常に荒れはてていて、人民はきわめて少なく、道路には白象や獅子が現われて恐ろしい。みだりに行くべきではない』[11]と報告している。ただしそれがゴータマ・ブッダの時代のものであるかどうかは大いに疑問である。

近年ネパール政府はカピラヴァストゥと想定されるティラウラコットの遺跡の発掘に着手したところ、新石器時代の石器、陶器、西紀前の貨幣などが発見された。僧院の址も発掘された。また彫刻も見つかったが、かなり古くから、リンガ崇拝の行なわれていたことが知られるにいたった。また一九六六年には打刻貨幣が発見された。ある小さな貨幣にはバラモン教の馬祀りのための馬が刻せられている。またグプタ王朝時代の一仏像が見つかった。さらにシスハニヤというところからはカニシカ王の貨幣が見つかったという。また西タラーイ盆地のベーダマウ(Bedamau)というところからはブッダ時代の陶器が発見されたという。[12]その後立正大学が大規模な発掘を行ない、発掘された遺品の写真の報告はすでに公刊されている。[13]

以上と多少重複するが、立正大学側の発表[14]によると以下のとおりである。

『一九六六年より六七年にかけてわれわれは、失われたカピラヴァストの遺跡を巡検する試みを

果した。この調査は、中村瑞隆仏教学部教授の首唱によるもので、大村肇教授（地理学）と久保常晴教授（現名誉教授・考古学）が共同して事を推進されることになった。

ティラウラコット遺跡については、P・C・ムケルジーの調査後一九六一年にインド考古局のミトラ女史が小規模の発掘を試みられた以降、そのままに放置されていた。われわれの調査希望に対して、ネパール考古局のタッパ局長は、考古局としても調査の希望をもっていたので共同して発掘の仕事を進めたい、との合議に達したのである。

そして一九六七年より調査に着手し、一九七七年より七八年にかけて実施した第八次調査をもって一応現地の発掘を終了することにした。七八年以降は遺跡の整備、遺跡博物館及び研究施設の建設、報告書の刊行、周辺遺跡の調査を実施することになっている。

ティラウラコット遺跡はネパール王国ルンビニー州タウリハワー町の北西約三・二キロに存在する。遺跡は南北約五〇〇㍍、東西約四五〇㍍の南北に主軸を有する長方形状を呈するもので、周囲にはレンガの壁が形成されている。ただ、西北のコーナーは、遺跡の西北方を流れるバーナガンガ川のかつての浸蝕によって失われている。そして、壁の北側の南・東方には、顕著な堀がめぐらされている。門と考えられる部分は、東辺に二、西辺に二、それぞれ認められるが、西及び南の各一門については不確定である。内部には、東北方に一、中央北寄りに一のタンクがあり、また建築遺構存在を示すマウンドが八丘存在している。

われわれは中央北寄りに存在する七号丘を発掘することにした。その結果、シュンガ・クシャ

ーナ期を中心とする遺構が検出され、上限は、N・B・P（北方黒色磨研土器）の時代より新石器時代にまで遡る遺跡であることが明らかにされた。N・B・Pに類似する土器の出土は、ティラウラコット遺跡の性格を考えるうえに、大きな示唆を与えるものであるが、私見ではN・B・Pの仲間でも比較的新しい様相のものであろうと観察している。

遺構としてもっとも遡る時期はマウリヤ期のものであり、そしてシュンガ期をへてクシャーナ期にいたっている。遺物は大量の土器のほか、テラコッタの類をはじめとして、貨銭及び石・銅・鉄製品など、その種類と出土量も多い。このほか、第十一号丘の発掘も実施した。十一号丘も同じ時期のものであり、とくにクシャーナ期のものが多く出土した。

この二つのマウンドの発掘は、ネパール考古局による遺構の保存と整備という意向によって最下層まで発掘の鍬を入れることなくして一応中止している。ただ第七号丘における遺構の検出されない地点における発掘の結果によれば、かなりの深い部分よりN・B・Pの出土する事実が確認された。かかる結果は、本遺跡築成の初期的な時期をN・B・Pの時代、すなわちB・C六〇〇～二〇〇に求めることが可能であることを示している。』

この遺跡の発掘は、考古学的にも歴史学的にも非常に重要な意義のある大事業であったが『ティラウラコット遺跡は、城塞遺跡であるが記銘遺物の出土はまだない』と報告されているので、決定的な断定はまだ得られないようである。[15]

ところが、近年インド政府考古学局がインド国内のウッタル・プラデーシュ（Uttar Pradesh）州の

ピプラーワー（Piprahwa）を発掘して、そこがカピラ城のあったところだと発表した。インド領内のピプラーワーは釈尊（または釈迦族）の遺骨の発見された場所である。

詳しくいうと、インド考古学局は一九七〇年からウッタル・プラデーシュ州北部で発掘調査をつづけてきたが、ついにカピラ城の所在を突き止めたと一九七六年に発表した。インドの学者たちがカピラ城の址であると推定するピプラーワー村は、首都ニューデリーから東へ約五〇〇キロ、ネパールとの国境のすぐ南にある寒村で、沼地のジャングルとマンゴーの林に囲まれたところである。ピプラーワーからルンビニーまでは九マイルにすぎない。いままでに、クシャーナ時代の僧院、塔、王宮の一部などいずれも煉瓦づくりの遺構を発掘した。また遺物としては滑石製の舎利容器二つ、深鉢三つ、テラコッタ製の印章（シール）四十などが出土した。舎利容器のなかには炭化した骨、深鉢には灰がそれぞれ納められていた。

ピプラーワーをカピラ城と決定するための決め手となった証拠とされるものは、僧院跡と推定される遺構から出土した容器の蓋にはっきりと「この僧院は神の子（＝天子）カニシカ王がカピラ城の僧団のために建てた」という文が刻まれていたことである。ただしわたくしは、それについて実物も写真も見ていないので、確証をもって報告することはできない。

しかしストゥーパ東側の僧院跡から出土した四十個以上のテラコッタ製のシールは、なんらかの歴史的事実をものがたっている。シールは、一カ所に集中というかたちではなく、僧院跡の地表から一・〇五～一・五五メートルの深さに散在し、いずれも直径約三センチメートルの不規則な円形をな

している。なかには、僧房の小龕に置かれたままの状態で出土したものもある。表面には一～二世紀ごろのブラーフミー文字で三～四行にわたって、「オーム！　カピラヴァストゥのデーヴァプトラ僧院のビク・サンガの〔所有〕」と読めるものや、「大カピラヴァストゥのビク・サンガの〔所有〕」と読めるものが存在する。「オーム！」(om)とはインド人が用いる神聖な音で、二世紀以後特に顕著となったサンスクリット復興の影響を受けていることを示す。「デーヴァプトラ」とは「神の子」(天子)と訳され、クシャーナ王朝(カニシカ王など)の銘文に帝王の称号として用いられている。

これらの出土品[16]から見ると、この地がカピラヴァストゥまたはマハー・カピラヴァストゥとよばれ、クシャーナ王朝の帝王(あるいはカニシカ王か?)によって建立された僧院が存在していたことが知られる。シールは携帯運搬が可能であるから他の土地からもってこられたという可能性も考えられるし、また「カピラヴァストゥ」なるものがかなり広い地域を表示していた可能性もあり得るが、ともかくピプラーワーがカピラヴァストゥに比定され得るかもしれないという根拠を示している。しかしこの地がカピラヴァストゥの遺蹟であるという絶対的な決め手はまだ見つかっていないようである。

マウリヤ王朝時代の貨幣も発見されたというが、しかしそれ以前のものがどれだけあるかは解らない。ストゥーパは再修理されたことがあるらしい。さらに、ここで舎利容器が新たに二つ発見され、そのほかにペッペがここで舎利容器を五つ発見したのと合計すると、すべてで七個発見されたわけであるが、それは異例ではない。アマラーヴァティーでは舎利容器が五つ発見されたことがある。

インド政府考古学局の報告を聞いてネパール政府の考古学者たちは激怒して、インド側の研究発表

は虚妄であり、やはりティラウラコットがカピラ城の遺址であるという報告書を作成して国際的に配布している。[17]

現在ではまだ断定的な結論を下し得るところにまで達していない。いずれが正しいか、その決定は将来の調査研究にまたねばならぬであろう。

双方が夢中になって争うわけは、もしもティラウラコットがカピラ城だとすると、釈尊は生まれはネパール人であったということになるが、それがピプラーワーであったとすると、釈尊はもともとインド人であり、たまたま母親が隣国のルンビニー園まで旅をしたときに釈尊が生まれたにすぎないということになる。ただし当時はインドという国家もネパールという国家もなかったのであるから、第三者にとっては感情的に激する必要もないのである。

ともかくカニシカ王の歿後カピラ城は荒れはててしまったらしい。法顕が訪れたときのありさまは次のように記されている。

『ここ(カナカムニ仏の生まれた処)から東行一ヨージャナたらずでカピラヴァストゥ〈迦維羅衛〉城に到る。この城中にはすべて王民なく、はなはだ荒れはてている。ただ衆僧と民戸が数十家あるのみである。白浄王の故宮の処に、太子の母の形像を作ってある。すなわち太子が白象に乗り、母の胎内に入る時の像である。〔また〕太子が城の東門を出て、病人を見て車を回して還った処など、みな塔を立ててある。〔そのほか〕アシタ〔仙人〕が太子の相を見た処、ナンダらと象を撲

ち〔弓〕射を捔った処などがある。〔この時、〕箭は東南方三十里の所で地中に入り、泉水をふき出させた。後世の人は〔ここを修〕治して井戸を作り、行旅の人に飲ませたのである。

〔さらに〕仏が道を得られ、還って父王に会われた処、五百人のシャーキャ族が出家してウパーリに向かって礼を行ない、大地が六種に震動した処、仏が諸天のために法を説かれたとき、四天王が四門を守り、父王もはいることができなかった処、仏がニグローダ（榕樹）の下に東向きに坐り、マハープラジャーパティーが仏に、サンガーティ衣を布施した処などがあり、この樹はいまもなお残っている。瑠璃王はシャーキャ族を殺したが、シャーキャ族が先にことごとくスローターパンナ（srotāpanna, 初果のさとり）を得た処にも塔を立て、いまもなお立っている。城の東北数里に王田がある。〔ここは〕太子が樹下において、耕者を見た処である。[18]』（『高僧法顕伝』）

カピラヴァストゥの場所を比定する試みをなすにあたって、カニンハムは法顕の記述がもっともたよりになるといっている。[19]

玄奘が訪れたときにも、やはり荒れていた。

『カピラヴァストゥ国は周囲四千余里ある。空城（人気のない町）は十数あり、荒廃はすでに甚だしい。王城は頹れ落ちて、周囲の量もさだかでない。その中の宮城は周囲十四、五里ある。煉瓦を積みあげて作ってあり、基礎はなお高く堅固である。荒れはててすでに久しく、人の住む所も稀である。〔国には全体を統治する〕大君主はなく、城はそれぞれ首長を立てている。土地は肥沃で、農業はそれぞれの時期に行なっている。気候に狂いはなく、風俗はのどやかである。伽

藍の跡は千余ヵ所ある。宮城の側には一伽藍あり、僧徒は三千余人。小乗の正量部の教えを学んでいる。天祠は二ヵ所、異道の人々が雑居している。[20]』（『大唐西域記』第六巻）

ただし玄奘は、建物が若干残存していて、それらが伝統と結びついていたことを伝えている。

『宮城の中に建物の跡がある。浄飯王の正殿である。〔建物の跡の〕上に精舎が建ててあり、中に王の像が作ってある。その側、遠くない所に建物の跡がある。マハーマーヤー（原注　唐に大術と言う）夫人の寝殿である。上に精舎を建て、中に夫人の像が作ってある。その側に精舎がある。釈迦菩薩が母の胎内に降神（胎内に宿る）された処である。〔精舎の〕中に菩薩降神の像が作ってある。上座部〔の言い伝えで〕は、菩薩はウッタラアーシャーダ月（アーシャーダ月の後半）の三十日の夜、母胎に降神された〔と言う〕。この（シナの）五月十五日に当たる。〔上座部以外の〕諸部ではこの月の二十三日の夜、母胎に降神された〔と言う〕。この（シナの）五月八日に当たる。[21]』（同上）

カピラ城以外に、シャカ族の都市、町邑、村落としては原始仏教聖典のなかに、チャトゥマー（Catumā, 車頭城）、コーマドゥッサー（Khomadussā）、メータルーパ（Metarūpa, Ulumpa）、ナガラカ（Nagaraka, 都邑城、邑名城）、サッカラ（Sakkara）、サーマ村（Sāmagāma, 舎摩迦子聚落）、シラーヴァティー（Silāvatī, 石主釈氏聚落）、ヴェーダンニャ（Vedhaṅña）があげられている。

また他方コーリヤ族の都市または村落としては、原始仏教聖典のうちにデーヴァダハ（Devadaha, 天臂城）、ハリッダヴァサナ（Haliddavasana, 黄枕邑）、カッカラパッタ（Kakkarapatta）、クンディー

(Kuṇḍī)、ラーマ村 (Rāmagāma, 羅摩聚落)[22]、サッジャネーラ (Sajjanela)、サープーガ (Sāpūga, 婆頭聚落)、ウッタラ (Uttara, 鬱多羅) があげられている。

このような歴史的社会的基盤のうえに釈尊が現われ出たのである。[23]

(1) *Sn.* 991.

(2) 後代の文献には Kapilapura(*Jātaka*, vol. I, p. 91) ; kapilāhvayaṃ……devanayaraṃ iva Kapila puram uttamam…… (*Mahāvastu*, vol. II, p. 21) ; Kapilāhvaye ṛṣivadanasmiṃ (=ṛṣipatane. Cf. F. Edgerton : *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, New Haven, Yale University, 1953, s. v.) (*Mahāvastu*, vol. I, p. 43). いずれにしても Kapila という名は保存されている。

(3) *Pj.* p. 353.

(4) *Pj.* p. 353. Śākyānām kumāra utpanno 'nuhimavatpārśve nadyā Bhāgīrathyās tīre Kapilasyarṣer āśramapadasya nātidūre (*CPS.* S. 324). 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』第七巻 (大正蔵、二四巻、一三四ページ以下) 参照。

(5) ガンジス河のことを Bhāgīrathī と呼んでいる (*Jātaka*, vol. V, v. 291)。

(6) Cf. Kuśinagarī.

(7) Cf. *Sn.* 1012.

(8) *DN.* vol. II, pp. 7 ; 52.

(9) 現在ネパールの地図によると、ルンビニー県のなかにカピラバストゥ郡がある (ネパール語ではサンスクリット語の va が ba となる)。この郡のなかにあるタウリハワー (Taulihawā) 町の郊外に Tilaurâ Kôt という壮大な遺跡が存在していて、これがカピラ城の遺跡であろうと推定されている。この推定のもとに立正大学はネパール仏教遺跡調査団を派遣し、一九六七年一一月以降発掘調査にあたっていたが、発掘計画はすでに終了し、調査報告がなされている。註 (13) 参照。同調査団の準備調査によると、ティラウラコット

の周囲には原始仏教聖典に散見するカピラ城周囲の都市名が、現に残っているし、また近傍にアショーカ王の柱が残存している。また法顕の『高僧法顕伝』や玄奘三蔵の『大唐西域記』などの記述を参照すると、ティラウラコット遺跡の現状とほぼ一致する。遺跡の東西の長さは三六五メートルあり、周囲には濠をめぐらしてある。またネパールのカートマーンドゥーのトリブヴァン大学の考古学科当局もタウリハワー町が昔のカピラヴァストゥであると推定している。

(10) 場所は北緯二七度三七分、東経八三度八分である (V. A. Smith, *JRAS.* 1898, p. 580)。Babu Purnachandra Mukherji and V. A. Smith : "Antiquities in the Tarâi", *Nepâl. Archaeol. S.* Rep. Imperial Series, vol. XXVI, 1901 に詳しく報告されているという。なおカピラヴァストゥについては H. Oldenberg : *Buddha, Sein Leben, Seine Lehre, Seine Gemeinde*, 9. Aufl. S. 111, Anm. 1 にあげた諸文献、平等通昭「迦毘羅城及び毘舎離城に就いて」(『仏誕二千五百年記念学会紀要』一九三五年、三三ページ以下) などを参照。

(11) 長沢和俊訳注『法顕伝』(東洋文庫194、平凡社、一九七一年) 八二ページ。以下この訳書をしばしば引用するが、私見により若干加筆することを了承願きたい。

(12) 以上はトリブヴァン大学考古学講師ラム・ニウァス・パンデーイ (Ram Niwas Pandey) 氏の教示による。

(13) *Tilaura Kot. The Rissho University : Nepal Archaeological Research Report*, vol. II. *Fortified Village in Terai Excavated in* 1967–1977. Edited by Zuiryu Nakamura, Tsuneharu Kubo and Hideichi Sakazume, Rissho University, 1978.

(14) 立正大学教授、坂詰秀一氏が『仏教タイムズ』に寄せられた報告。

(15) カピラヴァストゥの所在について、もろもろの問題点を吟味してあるのは、中村瑞隆「ピプラハワ発掘の今昔と問題点」(『印度学仏教学研究』第二五巻第二号、一九七七年三月、一一〇―一一七ページ) である。しかし同氏はなお断定的な結論を避けておられる。

(16) 〈『ブッダの世界』一四〇—一四四ページ pl. 2-11〉。発掘品がカラー写真で示されている。またそれ以前の報告として福田徳郎「ピプラワーの舎利容器」(『大法輪』一九八一年四月号、一八八—一九三ページ)があり、ピプラーワー出土の舎利容器大小二個となかにおさめてあった聖骨とのカラー写真が発表されている。それらは以前にペッペの発掘発見したものとは別のものである。

(17) *Tilaurakot, The Ancient City of Kapilavastu*, Buddha Jayanti Celebrations Committee (2520), Kathmandu.

(18) 長沢、前掲書、七九—八〇ページ。

(19) Alexander Cunningham : *The Ancient Geography of India*, New Enlarged Edition, Varanasi, Bhartiya Publishing House, 1975, p. 349.

(20) 水谷真成訳『大唐西域記』(中国古典文学大系22、平凡社、一九七一年一一月)一九一ページ。私見を加えて読みやすくして引用することを諒承されたい。

(21) 同上、一九二ページ。

(22) 釈尊入滅のとき舎利を八分したが、その八分の一を得た国として「羅摩伽国」があげられている(『長阿含経』第四巻、遊行経、大正蔵、一巻、三〇ページ上)。パーリ文(*DN.* vol. II, p. 165)には Rāmagāmaka Koliyā として出ている。

(23) なお最近の新説として、ブッダの実際の故郷というか本拠はルンビニーの近くのどこかにあったのではなくて、オリッサ州のうちの Kapileswara という名の村落であったと主張し、ルンビニーで発見されたアショーカ石柱碑文にきわめて類似している碑文を論拠としている(Chakradhar Mahapatra : *The Real Birthplace of Buddha*, Cuttack, Grantha Mandir, 1977)。著者はオリッサ人であると思われるが、従来の諸説を覆すことは困難であろう。

二　誕生

(一)　受胎と霊夢に関する伝説

後代の伝記作者は、ゴータマ・ブッダの誕生以前の段階に種々の神話伝説を想像して、挿入した。[1] まず、かれはトゥシタ天(Tusita, 兜率天、都率天)という天上の領域から降ってマーヤー夫人の胎内に入ったというのであるが、このことはすでにきわめて古い経典のうちに言及されている。

『尊者サーリプッタはいった、——わたしは、いまだ見たこともなく、また、だれにも聞いたこともない。——このように、ことば美わしく衆の主なる師(ブッダ)が、トゥシタ天から来りたもうたことを。』(*Sn.* 955)

ブッダはこの世に生まれる前にトゥシタ天に住し、[2] そこから没して、カピラ城の近くのルンビニー園で生まれたという伝説に言及しているのである。〔神格化へ一歩踏み出している。〕下ってくる釈尊は、ここではボーディサッタ(bodhisatta, 菩薩、「さとりを求める人」の意)と呼ばれ(*Therag.* 534)、また六牙の象にのって下りてきたという伝説(*Therag.* 968)が、古い詩句に伝えられている。

後代の伝説によると、ブッダはトゥシタ天から降って生まれようとしたときに、その誕生にふさわしい時機、場所、国、階級、種族、両親はいかなるものであるべきかを熟思したという。[3]